

I 共通項目

基本目標 心の豊かさ自ら学ぶ力を育てる学校教育の実現

目標	取組の内容 (必須…町内共通項目)	評価 (最高4)	分析及び改善策 (○…成果、●…課題)
心の豊かさ自ら学ぶ力を育てる学校教育の実現	<p>1 豊かな心の育成</p> <p>①いじめ、不登校への適切な対応 (必須)</p> <p>②道徳教育の充実、人権教育の推進</p> <p>③生徒による目標設定と達成努力</p>	<p>3. 8</p> <p>3. 5</p> <p>3. 1</p>	<p>○いじめについては、生徒の対人面による精神的不安も、いじめの芽の可能性もあると捉え、丁寧な聞き取りと対応を進めるなど、組織全体でいじめ認知への意識を高めた。</p> <p>○不登校については、生徒の状況に応じた個別の支援を図りつつ、生徒の学びを止めない対応に向け全職員で共通理解を図った。</p> <p>○道徳教育については、今年度も全職員で取り組むことができた。各内容項目は、学年の実態に応じた計画を進めることができた。</p> <p>○人権教育については、学校生活をもとに生徒自身を振り返らせる取組を通じて、人権感覚を高めることができた。</p> <p>●日々の学習やながよ検定に向け、自己調整力の向上に向けた取組に力を入れた。テストへの意識は高いものの、日々、見通しを持ちながら生活を送るまでは至らず、まだ、保護者・教師の見守りが必要な生徒が多い。家庭の協力を得ながら、引き続き、自己調整力の向上を図っていく。</p>
	<p>2 基礎学力の充実</p> <p>① 分かる授業の実施</p> <p>②家庭学習の習慣化</p> <p>③キャリア教育の充実</p>	<p>3. 7</p> <p>2. 7</p> <p>3. 0</p>	<p>○全職員で個別最適な学びへの授業実践に取り組んだ。生徒アンケートからも、授業理解について肯定的な回答が多かった。</p> <p>●一方で、保護者評価は低い傾向にある。授業参観の機会に、授業のねらいを示し、理解と協力を図っていく。</p> <p>●前述の自己調整力の向上が必要である。定期テストの取組とそれ以外の日との差が大きい。自分自身でどう取り組むべきかわかっていない生徒も一定数おり、「学び方を学ぶこと」に力を入れていく。</p> <p>○各学年の発達段階に応じ、キャリアパスポートを活用した取組を進めることができた。ただ、漠然とした考えの生徒については、教育相談の機会を通して、指導・支援を図っていく。</p>
	<p>3 健康安全教育の推進</p> <p>①基本的な生活習慣の確立</p> <p>② 健康・体力の維持・増進</p> <p>③生徒の危機管理意識の高揚 (食物アレルギー、メディア安全等)</p>	<p>3. 0</p> <p>3. 5</p> <p>3. 8</p>	<p>●年間を通して、個人差も大きく前後期通じて横ばいという結果であった。あいさつや呼びかけへの反応ができるよう、引き続き、力を入れていく。</p> <p>○全体の感染予防への意識は高く、昨年度より数値も上昇。ただ、一部生徒に睡眠不足・朝食欠食による体調不良が見られ、学校だよりや保健だよりで、保護者への協力を呼びかけた。</p> <p>○今年度は、給食担当・学級担任・管理職で複数チェック徹底に加え、アレルギーチェック表作成に際し、複数によるトリプルチェックを追加。引き続き、当該生徒自身の自己管理の徹底に取り組む。</p>

			<ul style="list-style-type: none"> ●毎月の情報モラル教育の取組により、校内での端末の不適切な使用は減少傾向にある。一方でSNS 使用に課題がある生徒もおり、家庭の確かな見守りと指導を引き続きお願いしていく。
4 特別支援教育の充実			
①一人ひとりのニーズに応じた支援 (必須)	3. 7		○特別支援コーディネーターと各学年担当を中心に、年間を通して、保護者との合意形成を図りながら、個別の支援に当たることができた。
②生徒の困り感の解消	3. 7		○スクールカウンセラーや相談員、行政及び各種関係機関と情報を共有しながら、適切な対応を図ることができた。
5 国際化への対応			
① 日本文化や地域への理解	2. 7		○総合的な学習「ふるさとキャリア教育」を通して、地域のよさや抱える課題への理解を深めることができた。探究のプロセスは改善の余地がある。
② コミュニケーション力の育成	2. 9		●表現が苦手な生徒もおり、表現活動の工夫が必要である。自分の考えをまとめる→表現（発表）する→相手の考えを聞き、振り返る活動を進めていく。
③グローバルな視野の育成	2. 6		
6 教育環境の整備			
①学習環境の整備	2. 7		○全職員でチェックし、修繕箇所があれば、速やかに対応した。老朽化や修繕見落としにもなう、事故やけがは0件であった。
②ICT機器の活用、情報の発信	3. 8		○生徒の教育活動や教職員の業務推進等、あらゆる場面で積極的に活用できた。特に、生徒の個別最適な学びや職員の効率的な業務推進を進めることができた。
7 教職員の資質向上			
① 指導力の向上 (必須)	3. 7		○研究主任を中心に、個別最適な学びの研究に取り組んだ。さらに、ながよ検定を通じた、生徒の学びに向かう意識向上、自己調整力の育成に向け、全職員で取り組むことができたことが今年度の大きな成果である。ただ、全職員が授業公開したものの、互いに、十分に参観し合うまでは至らず、環境改善が今後の課題である。
② 服務規律の遵守	3. 8		○各種通知の通達や職員室だより等を通じて、全職員の注意喚起や、意識のアップデートに努めてきた。今年度も職員の服務規律遵守への意識は高く、不祥事防止に全職員で取り組むことができた。
③「教職員の働き方改革」に基づく風通しの良い職場づくり	3. 7		○昨年度より、数値が向上(3.4→3.7)月80時間以上の超過勤務者は0名。45時間超えも減少傾向にある。今後も、「一人にならない・一人にしない」を合言葉に、支え合い・助け合いのさらなる意識向上を図っていく。

2 自己評価のまとめ（成果・課題等）

(1) 成果

① 学び方を学ぶ・自己調整力の育成

県・国の学力調査においては、平均を上回っているものの、学習の進め方や時間の使い方に課題がある生徒が一定数いる。

学び方を学ぶことや自己調整力を定着させることは、これから保護者・教師の手を離れ、生徒自身が「自立した学び手」となり、自分の目標や夢に向かっていく基盤になると捉えている。今年度の全学年の「ながよ検定」や、2年英語科の「習熟度別学習」の取組は、現段階で大きな成果をあげるまでは至っていないが、生徒・教師が高い意識で臨み、学びに向かう雰囲気为学校全体に広がるなど好循環をもたらしている。今後、家庭学習の充実に向け、保護者に家庭での見守りと声かけを行うよう働きかけていく。

② いじめ問題への組織的対応

いじめの認知度を高め、学年・関係職員がチームとなり、「初動はすばやく」・「被害生徒への寄り添いを第一に」・「手順・段取りは丁寧に」を原則として、いじめ問題に組織的に対応してきた。例えば、生徒が対人面で不安を抱えてる相談についても、「いじめの萌芽」と捉え、丁寧な聞き取りと、周囲への確認を入念に行うなど丁寧な対応を進めてきた。毎回、一定の時間はかかるが、安心・安全の学校生活を送ることができるようになるためにも、これらの対応は不可欠である。

③ 同僚性・協調性のある風通しのよい職場環境

職員一人一人にも、家庭生活がありその状況は様々である。以前のような、超過勤務や仕事の持ち帰りの常態化は、職員の心身の健康を損なう最大の要因と捉え、今年度も「支え合い・認め合い」職場環境づくりを進めてきた。今年度は、昨年度を超える自己評価となった。一人の職員の困りごとを、みんなで分かち合い、助け合う雰囲気があり、職員の心理的安全性の向上につながっている。

(2) 課題等

① 不登校・別室登校支援

昨年度とほぼ同数といった状況である。本校の多くの生徒が、高校進学を希望しており、これらの生徒も同様である。中学卒業後の進路実現に向け、学びを止めないことが必要であり、家庭とのさらなる連携が求められる。生徒の状況により、個に応じた学びの進め方について、家庭の協力を得ながら進めていく。

② 学ぶ姿勢の土台づくり

前述の「成果」であげたとおり、学校全体の学びに向かう姿勢の好循環は生まれたものの、小学校のころから長い期間、学力不振に悩み、現状をなかなか変えることができない生徒もいる。「読む」・「書く」・「聞く」といった学ぶ上で基本となることから、各教科で意識させることにより、学ぶ姿勢の土台作り時間に時間をかけて取り組んでいく。

③ SNS との関わり方

学校全体で取り組む毎月の情報モラル教育も1年半となった現在、トラブルは減少傾向である。ただ、0件にはならないのが実情である。生徒の認識の甘さやずれがあり、家庭においても、我が子の使用状況を把握できていないケースもある。

生徒を、被害者や加害者にしないためにも、生徒の情報モラルをさらに高める取組を継続していく。また、保護者に対しても、引き続き、子どもの使用状況や使用時間に基づいた家庭のルールの見直しを定期的に行うよう協力と支援を働きかけていく。

3 学校関係者評価

- ・本校自己評価は、全ての項目において、妥当との意見であった。
 - ・評議員の皆様から、以下の質問や意見をいただいた。
 - ①授業参観での生徒の様子について、授業を楽しく受けているように感じた。わが子を通わせていた時と比べ、カリキュラムも変わっている。授業参観して、毎回、新しい発見がある。
 - ②中学生がよくあいさつする。家庭・学校の教育が行き届いていると感じる。家庭・地域・学校三者が、子どもを中心に見守り、一緒になって触れ合える機会を作ってほしい。
 - ③授業参観をしたが、落ち着いた雰囲気だった。ICTを活用している授業もあった。
 - ④いじめの認知件数14件について、学校はよく見てくれていると思う。引き続き、アンテナを張って、対応に当たってほしい。
 - ⑤学校評価で低い項目である「家庭学習の習慣化」については、生涯学習の視点からも、PTAを通じて家庭に投げかけるなど、協力していいと思う。
 - ⑥SNSの使用、携帯電話の取扱いについて、PTAとしてこれまで持たせないという方針で呼びかけていたが、学校の一人一台端末や、携帯電話を所持する生徒数の増加にともない、今後、家庭のルールづくりや情報モラル沿った使用について、各家庭に発信していきたい。
 - ⑦PTAが働きかける「携帯電話の適切な使用」については、当然の流れだと思う。携帯電話の取扱いについては、学校の管理ではないので、家庭でしっかりと意識してほしい。今後、保護者向けの研修会など実施するのもいいのではないか。
 - ⑧携帯電話の使用については、子どもだけではなく、親（大人）も、自分の使い方を振り返り、時間を減らす、使い方を見直すなど考えることが必要と思う。
 - ⑨教職員の超過勤務45時間越えは、長与中だけか？
- 昨年度のこの会で、周知不十分であった「いじめ問題への対応」は、おおいに理解していただくことができた。引き続き、どの事案も「いじめの萌芽」としてあたり、アンテナをより高くし、「いじめ認知」に対する意識を高め、早期発見・対応・解決に取り組んでいく。
- 「SNSの扱い方」、「家庭学習の習慣化」についても、これまで以上に、学校の取組を理解してもらおうとともに、家庭の協力を得ることが重要との意見をいただいた。

4 対策等の見直し（学校関係者評価を受けて）

□「学び方を学ぶ」取組の充実について

今年度、年2回行う「ながよ検定」を通じて、「学び方を学ぶ」、「自己調整力の育成」に取り組んだ。毎回、全職員で方策を練りながら臨むことができた。この良い流れを「家庭学習の充実」につなげることができるよう、生徒自身に、改めて「学ぶことの意義」、「見通しを持ちながら学び続けることの大切さ」の理解を図っていく。併せて、引き続き、家庭の理解と協力を少しでも多くの家庭に働きかけていく。

□「ソーシャルスキルトレーニング（SST）」等を活用した対人関係能力の向上について

年間を通じておこる生徒間の対人関係問題の原因を紐解くと、自分の気持ちを表現できなかったり、相手の気持ちを汲み取ることができなかつたりということがあげられる。生徒一人一人が、学校内外を問わず、社会で他者と良好な関係を築き、適切に行動するための対人関係の能力（SST）を高めていくことで、より安心・安全の生活を送ることができるよう資質能力の育成と学校環境づくりを進めていく。

【留意点】

評価は、自己評価をもとに学校関係者評価にも十分配慮し、総合的に判断し記入する。

評価は4段階とし、以下による。

4 十分達成できている

3 概ね達成できている

2 どちらかという達成できていない

1 ほとんど達成できていない